02の講義内容

文字のはなしと音訓について

―文字資料(漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字)から日本語學資料へ―

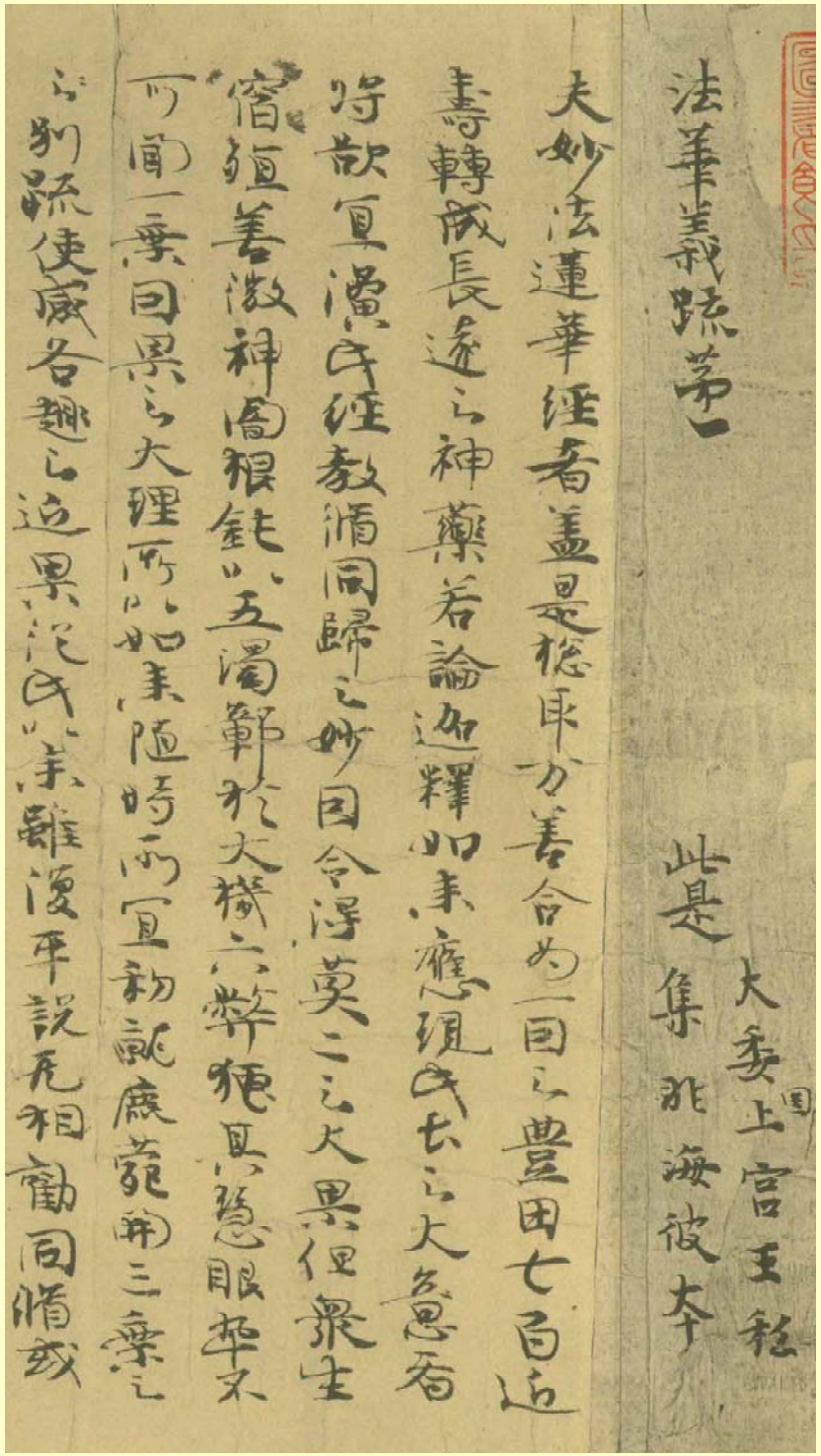
萩原　義雄

日本最古の文献資料とは

私たち人類が言語活動を開始したとき、話す＝聞くこと、書く＝読むことを、いつどのようにし始めたのか興味を抱かずにはいられません。

このなかで、話す＝聞くことの言語形態は一過性にすぎず、露の如く消滅していきます。これに対し、書く＝読むことの言語形態は、後世に継承することが可能でありました。ここでは、後者の書く＝読むことの言語形態を素について話を進めてみましょう。

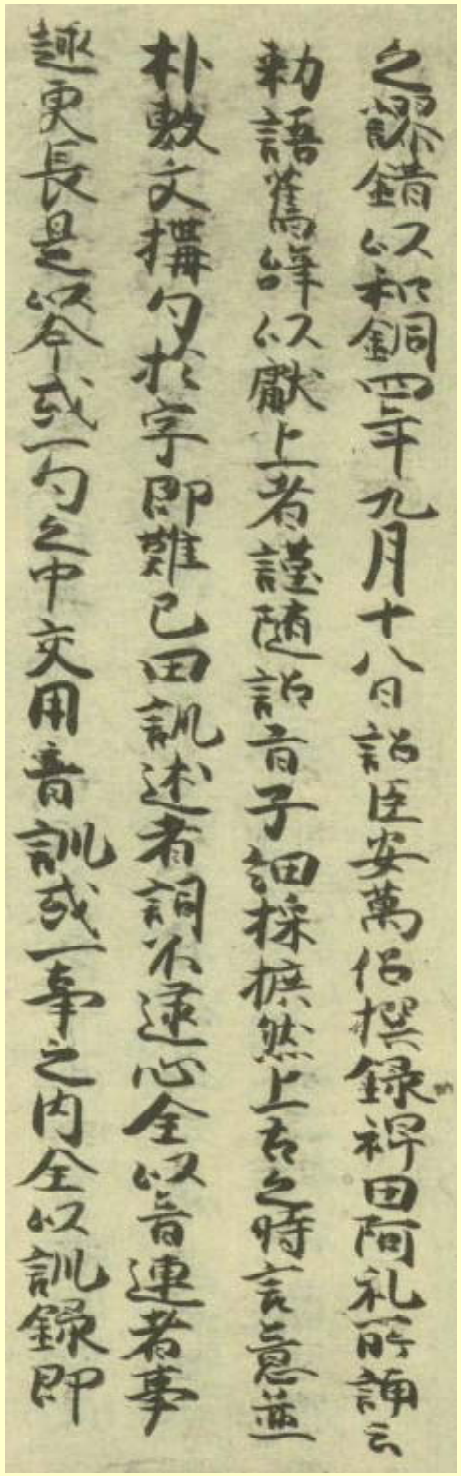
漢字を用いた日本語表記の遺品としては、五世紀半頃の二種の「金石文」、紙の資料としては、聖徳太子自筆本『法華義疏(ほつけぎしよ)』〔御物、推古天皇二十三年(西暦六一五)〕や後の『日本書紀』所載の『十七條憲法』が知られています。この『法華義疏』の料紙は、中国の唐紙を用いていて、未だ本邦では和紙の生産ができず、輸入した高価な品物の一つであったようです。ここに尤も最古の紙媒体による日本文献資料として、今日まで維持・保存されてきました。この書記者が聖徳太子なのかの爭の真偽については諸説があり、未だ定説を見ない資料でもあります。ただ、この書記文字について云えば、当代の四六駢儷体の文章的特徴が表出されています。



《参考資料》紙★コラボレーション　http://www.epson.jp/technology/mirai/paper/

日本最古の文字

古代日本人は、文字を用いていなかったと云いますが、果たして本統に文字言語と無縁な世界にあったのでしょうか？よく、文字が使えなかったので口誦により伝えてきたと云われてきました。実際、日本の古代神話をまとめた『古事記』〔和銅四年(七一一)九月十八日〕には、「臣安萬侶」が「稗田阿礼」の口誦する内容を記録した。



然。上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。已因訓述者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今。或一句之中。交用音訓。或一事之内。全以訓録。

と、このような日本語に於けることば表現の有様が語られています。そして、この『古事記』は、中国の漢字音を以て、日本語の音に当てはめて表記しています。

《参考資料》

◎紀田順一郎著『日本の書物』―太古のロマン『古事記』―〔勉誠出版二〇〇六年刊〕

1、『古事記』太古のロマン。〔14頁〕。古代→「吾と汝と天の下」「日本神話の独創性」「原稿用紙六十枚の原典」 http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo_kojiki01.html

◎神野志隆光著『漢字テキストとしての古事記』〔東京大学出版会二〇〇七年二月刊〕

『古事記』は、本文を訓主体で、歌を音仮名で書くという書き方を文字の技術的環境から選択しました。それは、散文と歌との違いについて自覚して成り立たせられています。（中略）訓による叙述と、音仮名による歌の表現とが、張り合うようにして、いわば叙述を複線化しているのが、テキストとしての『古事記』のレベルだと見るべきです。〔70頁参照〕

今日は、この文字の起源にはじまって、古代から現代のこの日本列島にもたらされ、これらの書記文字がどのようにして広まっていったのか？その大概を伝えていきましょう！

※「しほ【塩】」という文字を例として

〔14620 大字典 47579 諸橋〕

http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/bunken-sihonomoji.htm

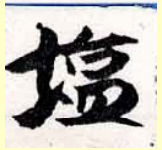
http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/ko_shihonomoji.pdf

「漢字字体規範データベース」における「塩」文字

開宝十通

斉民要術

兼方紀2



鴨脚紀2

《参考とする語句》

金石文　布帛文　竹簡・木簡　唐紙・和紙　洋紙　電子ペーパー

《今後の課題》

日本の最古の神話『古事記』は、原本は残存せず、鎌倉時代の古写本が伝来しています。この、『古事記』の本文〔写本類〕と電子印影や入力された文献資料を今後どのように見ていくのか?。そして、国内の研究にとどまらず、海外での碩学状況はどのような研究業績の情況化にあるのかを正しく認知した上で、次に書記文字研究の視野として、如何なることが期待できるのかその展望を考えてみようではありませんか。